
そうだ、人（その他諸々）助けをしよう

利野海子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そうだ、人（その他諸々）助けをしよう

【Nコード】

N0180K

【作者名】

利野海子

【あらすじ】

全然普通じゃない主人公瀬清瀨公命が、全くもって普通じゃない教会で、普通を吹き飛ばす吸血鬼に出会うベタベタな自己満足小説しかも未完

序章

癖になりそうな、つるばらの香り、むせかえるような、甘い蜜の匂い。

つるばらの柵に覆われた、大きな教会、その裏にある、小さな裏庭、そこに立つのは年の離れた二人の男女。

それは、頭に着けた真っ赤で、大きなリボンが象徴的な、フリフリ、つまりフリルやレースのたくさんついた真っ赤なドレスを着た、金髪に、灼けるような赤い瞳をした少女（幼女）と、黒い無造作ヘアの高校生ぐらいの少年の二人だった。

その二人は何をする訳でもなく唯々立っていた。いや、それはつつたっていたと言う表現のほうが相応しい。どれくらい立っていたのだろう。どれくらい時間がたっているのだろう。

客観的な時間に直すとかれこれ四分の一時間ほどこうしていたと思う。

因みに、先程の「何をする訳でもなく」、というのはあくまで言葉の綾であって実際は双方共行動を起こしていた。

なんらかの行動、といっても通り過ぎて一見しただけでは分からないだろう。

少年の方は少女に向かって、驚いたような表情をし、少女の方は少年に向かって、見定めるような目でじろじろと睨み付ける。

それを八半刻である。

傍からみると何をしているのだろうと思われるだろう。

（とはいっても道路からは、ばらの蔭に遮られているため、トゲが刺さるのを覚悟しない限りは覗けない）

似ていない兄妹のような二人が、平日の、しかも真っ昼間にだ、怪しまない方が不思議だ。（夜だとそれはそれで怪しいが、）

怪しすぎる。

そもそもキリストと深く関わりがある訳ではないのに、さびれた田舎、とまではいわないとしても、せいぜい他県の人に聞いたら名前すら知らないような場所に、こんな大きな教会がなぜあるのだろうか、しかも向かい合って二つも、さらにキリスト教徒でもない遊び盛りの高校生がなんで教会の裏の庭なんてシスター達しか知らない様な場所にいるのだろうか、まだまだ疑問は尽きない。

そんな些細なことはその辺の草むらにでも投げておくとして、こんな時間に高校生がこんな場所にいたら非常に不審だ。教会のシスター達が来ていないので助かったが、来ていたとしたら、・・・この小説は脱獄モノになってたかもしれない。

そんなことにはしたくない。まあそれはそれで面白そうだが、それはまた別の機会としよう。

そうしている間にも時計の秒針が千八百度くらい、分針が三十度くらい回転できる時間がたってしまった。

二十分もこのままなのだから、そろそろなんらかのアクションを示さなくてはならない、そう少年が思った矢先に、突然に、本当に突然に、少女がその小さな口を開いて、大きな赤い瞳を爛々と輝かせ、こう言い放った。

「決めた！あなた、私のしもべ下僕にしてあげるわ！」

この随分と上から目線な台詞に、少年はこう思った。

・・・・・・嗚呼何でこんなことになったんだろう。変な好奇心など抱かなければ良かった、と。

第一章

それは、どこにでもある高校での話だった。

そこでは、一人の男子高校生が入学して初めてのサボリを実行して、学校中大騒ぎになっていた。

たった一人のサボリ程度で何故大騒ぎになるかというと、別にその学校のセキュリティが要塞のようだった訳でもなく、開校してから一人として無断欠席が無かった訳でも無い。

普通の学校で、普通にサボっただけである。

もし騒然とするのであったならば、クラス騒然がいいところである。それにも関わらず、学年の壁を通り越して全校が騒然となったのは、それが特別な日であったからに他ならないであろう。

その特別な日とは入学式のことだ。そこで新入生がいなくなったのである。しかも、新入生代表が、だ。普通大騒ぎするだろう。

まあ、そもそも入学式をサボる奴が新入生代表を努めている時点で普通ではないのだが。

その脱走した少年の名を、みつのせ瀬清瀨こう公めい命という。大層な名前の通り、大物で有名なのだが、名前とは別方向に大物なのである。

つまりどういう方面なのかというと、因縁をつけてきた不良と喧嘩をして、勝って、不良を許して、それどころか、気にしてなくて不良のボスに気に入られて、必要ないのに舎弟が数十人いて、喧嘩の腕に関しては県下に知らぬ者無し、と言った感じである。（下らない駄洒落はスルーで）

そして高校の入学式でもその大物ぶりを存分に披露してくれた訳なのだが、先生達にとっては只の不良生徒、煙たがられるべき存在なだけである。

それでもまあ先生達にどう思われてるにしても、事実としては、基本的に、あくまで基本的に人畜無害な善人な訳である。町内には彼に救われた人だけで野球チームを三チーム程いるだろう。

（そのため、中学の頃は女子で結成された彼のファンクラブがあったとか無かったとか）

彼を三年間見て、ようやく彼の本質が見えた中学時代の先生達が良さに書いてくれた内申と、悪くはない頭脳と、校長先生が前、彼に救われたことが相まって新入生代表に選ばれた訳だが、彼の人の良さ、というのは新入生代表の様なそれとはかなり違うため、というかメンドくさかったため、サボったのだが、これが彼、及びその周辺の人物をこれから始まる「奇妙な出来事」に巻き込む原因になるのだがそんなこと今の彼には知る由も無かった。というかあるわ

けないので彼に非は無い。(サボった時点で充分わるいがそういうことでは無い)

公明は、学校をサボって些か暇だったため普段は目もくれないような教会に出向いた。

どんな気の迷いがあったのかは分からないが、とにかく彼は、教会に行ったのである。二つあるほうの、西側の教会に。ここで東側を選んでいたら、彼は別の不思議に巻き込まれるのだがそれはまた別の話だ。

そういつた理由で彼はこの教会にいるのだが、流石に教会の中には入ってないらしい。まあ中にはシスター達がいると思ったからだろう。

サボりの身で見つかるのは非常にヤバイ。シスターに説教されてしまいかもしれない。それは非常に避けたい。

そんなわけで彼は教会の庭らしき所で散歩をすることにしたらしい。「ふーん、教会ってこんななのか。普通に予想通りでつまんねーな。まあそんな奇抜なデザインを採用する訳無いもんな。にしても今頃学校どうなってんのかな、大騒ぎしてるんだろ。まあ念の為代役を用意しなかった学校が悪いってことで、こんなこともあろうかとちゃんと原稿処分したしな。」

この随分長い独り言を呟いてるものこそ公明である。どうやら公明は独り言が癖らしい。

公明が垣根に止まった蝶々を捕まえようとしたその時だった。ガチヤツ、キ~~~~、・・・・・・バターン！

この音はここを通ると時々する音だったので、公明はこの音が何かを知っていた。それは何ということもない、只のシスターの総外出であるのだが、(少人数の時は脇の小さなドアを使う)そんな事は今の彼にはどうでも良かったのだ。(じゃあなぜ解説をした)

公明は振り向いた。シスターが来る！隠れないと！どこに？・・・あそこだ！

公明は壁と蔓の間の隙間に入った。これもまた、彼が不思議な事に

巻き込まれることになった原因の一つである。

公明は、シスターが外に出るまでの数分の間に、「それ」を見つけ
てしまった。「それ」とは壁と蔓の間の更に奥にある空間だった。
見つけた時点では「それ」にはなんら問題もなかった。

ただ、彼の「この奥には何があるんだろう。」といった僅かな好奇心、
誰もが抱くであろう好奇心が、彼の人生を大きく変えることにな
ったのである。

そして彼は「それ」に向かって歩いた。歩いた、といってもたった
数歩だが。

そしてそこには・・・一人の少女が立っていた。

そして今に至る、ということである。

説明終了。

「だからさっきから言ってるでしょ？あなたを私の下僕にしてあげ
るって」

「だからなんでそうなるんだ！しかもしてあげる、ってなんで上か
ら目線なんだよ！望んでねえよ！受動態か能動態かで大違いだから
な！？」

「じゃあ言い直すわ、おいげばく下僕。」

「漢字を変えろよ！っていうか意味を変えろ！ってそもそもなんで
ご奉仕決定なんだ！」

「うっさいわね。奴隷」

「さらに酷くなってる！」

「驚いたわ！」

「奴隷の意味を知ってることにか！？誰でも知ってるわ！そんなも
ん！」

「あなたがここまで生きてきたことに！」

「なぜ今そんなことを！？」

と、まあこんな感じの会話が小一時間続くことになって、

「ハア、ハア。まさかここまで突っ込みを入れられる事に驚いたぜ。
俺ってそんなキャラだったのか。いままで知らなかったぜ。」

「あなた異常じゃないわね。」

「それって普通って事だ！」

「特別にあなたを椅子にしてあげるわ！」

「いままで言われてきた中で間違い無く最低の褒め言葉だよ！この野郎！」

「私は男では無いので野郎ではないわよ。」

「そんなんでもいいわ！」

「奴隷にならないと、今思い付いた私の最終扇であなを葬るわ！」

「扇子かなんかか！」

「喰らえ！おまわりさん。この人が・・・」

「奴隷になります。」

「素直でよろしい。」

「これのどこが素直だ。」

「ていうかなっちゃん。場のノリで。」

「さあ親密な関係になったところで自己紹介でもしましょうか」

「これのどこが親密な関係だ！」

「私はファイア。名字なんてないわ。」突っ込みをスルーしやがった！

そんな事よりも外国名なのか。名字が無いのはいいとして、ファイアー恐怖だと？そんな名前付ける親がいるのか？

ファイアは一呼吸おいてこういった。

「正体は吸血鬼よ。」

第二章

「正体は吸血鬼よ。」

「・・・数瞬空けて。」

「ふーん」

「驚かないの？」

「別に」驚いた方がよかったか？

「あなたって変わってるわね。」

「よく言われる。」悔しいが本当の事だ。

にしても吸血鬼か。えゝと吸血鬼って確かこんな感じだったけ？

吸血鬼 一般的な吸血鬼の特徴として、日光、十字架、大蒜、聖水、銀を嫌い、棺で寝て、寝ている間に杭で心臓を刺すと死ぬ、とまあこんな感じである。吸血鬼の最大の特徴は、名前の通り血を吸う事である。大抵の物語では、吸血鬼は男である。それに関係してるのかは知らないけれど、夜道で若い女の血を首筋から吸うのが好きらしい。他にも空を飛んだり長生きだったりする。

とまあこんな感じか。以上が俺の吸血鬼に関して今思い出せる限りの情報である。詳しく知りたきゃウィキペ。イアで調べろ。

吸血鬼は一般的に考えると妖怪な訳だ。それなら名字がないのも、ファイアーという名前なのも頷ける。納得はできないが。

ちなみに、さっき「私は吸血鬼だ」と言っのを聞いて驚かなかったのは、前述されてる通り、俺は沢山の人を救ってきた。そしてトラブルに巻き込まれた人達の中には、他人には相談できない悩みを抱えている事が多い。精神の事であったり、恋愛の事であったり、
・ 怪異の事であったり。その中に、数人、「そういった者達」がいたから、只それだけである。でも、全然驚かなかった訳ではない。人間には慣れがあるとはいっても俺の人生は所詮十五年でしかない訳なのだからそりゃ驚く。クラスの五月蠅い男子が読書家だった位の驚きはある。まあその例にも人によっては驚く度合が違うかも知れないから一概には言えないのだけれど、俺にとってはそれくらいだ。

関係ないが、「そういった者達」の中に吸血鬼はいなかった。いたのは名前も聞いたことの無い異国の妖怪であったり、あるいは日本古来の悪戯するだけのようなやつばかりだった。・・・一度だけ誰もが名前を知っているであろう妖怪と死闘を繰り広げたことがあるがそんな関係の無い話はいまはどうでもいい。

さて、なんで吸血鬼なんて妖怪ヒエラルキーがあるとしたらそれの最高位にいるような妖怪が、こんな小さな島国の、小さな町の教会にいたるんだろ。普通吸血鬼がいる所といえばイギリスの大教

会の地下にひっそり封印されてるとか山に吸血鬼のアジトがあるとかじゃないのか？

まあ誰が決めた訳でも無いのだが、吸血鬼といったら大抵の人がそれをイメージすると思う。多分、きっと、恐らく。

たとえばだれかが、吸血鬼は押入れに住んでる。と主張してたとしても俺にはなんら問題無い。

それよりも「今」「ここに」「少女の」「吸血鬼が」「普通に」「立っている。」というところに問題がある。

ものの本に「どこに何があっても、それを信じなくとも、実際にそれがそこにあるのならは一切問題は無い。」という言葉があつた気がしないでもない。

つまりこの場合はファイアーがここにいるのは、実際にここにいるのだから問題は無いんだろう。確かに問題は無い。人によっては「いやいや、吸血鬼や妖怪なんていなんだからそこに問題があるだろう。」とか言うかもしれないが、それは至極的外れな意見だ。なぜなら、今話題にしてる「問題」とはそういったニュアンスとは違だし、それに、実際にいるんだ、吸血鬼が。

ああそういうことか。今ようやくあの本に書かれていた言葉の真の意味が分かった、気がする。作者も必至で考えたであろう言葉を十五歳の若輩者に理解された気分になって欲しくないだろう。俺だってそうだろう。必至で考えた深い言葉を自分の人生の三分の一しか生きていないような若僧に理解したような気分になって欲しくない。まあもつとも俺の心がせまいだけなのかもしれない。

「ねえ、ちよつと！聞いているの！？」ビックリした。

「え？ああああ聞いている聞いている。」聞いてないがな。

「私は一言も喋ってないのに？」くそ、嵌められた。

「本当は何も聞いてませんでした。」

「まったく。そんなことでは私の奴隷に相応しくないわ！クビにするわよ！」

「はやっ！もうその段階かよ！」

俺としてはさっさとクビにされたいがな。

「クビにした瞬間叫ぶわよ。おまわりs・・・」

「すいませんでした。」

「うん。それでよし。」

「唐突だが一つ聞いていいか？」

「奴隷ポイントが一点減るけどいいわよ。」なにそれ！？

「うんまあ奴隷ポイント云々はともかくとして、奴隷ってなにすりゃいいんだ？」なる気はないけどな。

「さあ？」

「なんじゃそりゃー！！！！」

「いいじゃない。欲しかったのよ、奴隷。」

「なんじゃそりゃー！！！！！！！！」

「同じ言葉を二連続で使うとアホっぽいわよ。」

悔しいが言い返せない。

「んゝ、でもやっぱり目的がないと駄目よね。なにか目標を立てようかしら。んゝとえゝと・・・そうだ！いい事考えたわ！」

あつ、なんか嫌な予感。

「そうよ！人助けをしましょう。」

ワイイ、嫌な予感大的中！

「そうよ！人助けをすれば、皆が私に感謝して、崇めるだろうし、きつと謝礼とかも貰えるはずだわ。そうすれば、」

「そうすれば？」

「地球侵略も楽になるわ！」

「なんですとーーーー！！！！！！！！！！」

今こいつ地球侵略とかいいやがったか！？しかもなんか人助けの理由が自分中心だし！

「おい！お前地球侵略するつもりなのか！？」

「ハア？バツカじゃないの？冗談に決まってるじゃない。」

ビュオーーーーー・・・・・・・・・・なんか自分の中だけに台風が吹いてる感じだぜ。

普通に考えたら、当然冗談だろう。でも、今のこの状態を考えれば冗談じゃない可能性が格段上がっている。だから俺をバカなどではない。なんて考えてたら、寧ろ心の中の台風がブリザードに格上げされた気分だぜ。

「解散！」

「何が!？」

「聞こえなかったの？今日はこれで解散。帰っていいわよ。眠いし。」

「まだ昼間だな。」

「吸血鬼は昼と夜が逆なのよ。常識でしょ？」

「どこの基準でだ。」

「いただきます。」

「へっ？」

「本当は夜食は太るからしたくないけど、しょうがないわよねー。」

プスッ。チュー………

薄れ行く意識の中で、僕は思った。ああ、忘れてた。こいつ、吸血鬼だった。バタッ。

二章

入学式、つまり公命が、とある少女と出会いを果たした三週間後、彼、瀬清瀨公命は学校にいた。

公命は、元気の無い顔をしていた。

「やあ。どうしたんだい？とはあえて聞かないとしても、暗い顔してるね。薄々分かっていた自分の悪い所を注意されたかい？」

「それは痛い！」

こんな会話をしているのは、片方は当然公命、もう片方は備前芳丸という公命の十年來の友人だ。

彼は公命と気軽に会話できる数少ない一般人だ。又、彼自身も以前トラブルを抱えたときに公命に救ってもらっている。（本人に記憶は無い）

フィアーの事も知っている。その為、公命の元気が無い理由を知

っている。最初の会話は挨拶みたいなものだ。

「にしても本当に困った。」

「そうだよねえ、まさかフィーフィーに血を吸われると鬼の如き身体能力になり、尚且つ痛みなどを感じなくなるトランス状態になるなんてねえ。」

オイコラ、どこ見て喋ってる。そして何故説明口調なんだ。

因みにフィーフィーとは芳丸がファイアーにつけたニックネームだ。

本人曰く、「ファイアーは妖精みたいだから、名前も妖精っぽくしよう。」ということらしい。

まったく吸血鬼だというのを知っているのによく「妖精みたい」なんか言えるな。あいつの頭にはポジティブ神経が百本くらい通っているのだろうか。もしそうなら俺に五本くらいは分けて欲しいぜ。本題に戻ろう。さっき芳丸が言ってた通り、俺はファイアーに血を吸われると気絶した後、身体能力が向上する。しかも並の向上ではない。鬼レベルだ。このトランス状態は三十分から一時間程度の間しか持続しない。

芳丸曰く、「それは君の身体が耐え切れてないからだよ。身体を鍛えれば二時間ぐらいにはなるんじゃない？」という事だ。

確かに運動こそできるものの、身体の頑丈さでは百人並である。そして大事なことがもう一つ、血を吸われ、気を失い、身体能力が向上し、三十分から一時間後にまた、気を失ってしまう。

これが大変困る。なんせ、俺達はこの能力を使って人（その他諸々）助けをする予定だったのだから、こんなことではすぐに案件を片付けなければ大変な事になる。まあこれは身体能力を向上しなければならぬ状況にある事を前提としているのだが。

「取り敢えず身体を鍛えようか。」

「俺ムキムキになるの嫌だぜ？」

「君は身体を鍛えるというとムキムキになるイメージしか無いのかい？」

違うのか？

「その顔だと、違うのか？って感じだね。」

「バレたか。」

「まあ冗談はここまでにして、」

「俺は冗談なんかじゃない。」

「ハイハイ。でも本当に身体を鍛えなきゃなんですよ？」

「あゝ、うんまあね。」

「じゃあ、鍛えよつか。」

「鍛えるってもそんな簡単じゃないだろ？」

「普通なら、ね」

芳丸のその言葉はなにか含むような言い方だった。

「じゃあ俺は普通じゃないのか？」

「吸血鬼に一週間に一回血を吸われてる辺り普通ではないけどね。」

「そういう意味じゃねえよ。」

「アハハ、まあいいや。要するに僕が言いたいのは、普通の鍛え方なら、って事だよ。」

まだ分からん。じゃあ芳丸は普通じゃない鍛え方を知ってるというのか？

「それは後のお楽しみ。おっと、もうHRが始まっちゃう。」

そついうと芳丸は自分の席へと戻っていった。

慌てて時計を見ると、芳丸の言うとおり時計の針は担任の来る予定の時間を示している。

俺はただ芳丸の言っていた、「後」が気になって授業どころでは無い。俺は自分にそう言い訳をして、机に腕と頭を置いて、爆睡コースをマッハ二で直行した。グカー。・・・・・・・・・・・・・・・・

「おい、授業終わったぞー。」

「おうあ？」

「やっと目が覚めた。次理科だから教室移動だよ？」

「あれ？理科って四限じゃなかったか？」

「ふゝ、公ちゃん。いまだにこの状況が分からないのかい？場合に

よつては僕の携帯電話の履歴に眼科への番号が残る事になるんだけど……」

「?……って、どわあ！俺三時間も寝てたのか！」

「先生に一度も気付かれてないのはある意味奇跡だよね。」

「やべえ、ノートとつてない！」

「君の才能には恐れ入るよ。」

「何の事だ？それよりノート！」

「寝ながらノートをとるなんてね。」

「なにい！」俺すげえ！

「取り敢えず数学の例題だけ解いた方がいいよ。理科ならノート取らなくても大丈夫でしょ？」

「大丈夫ではない。後でお前のノートを写させてもらう。」

「うんいいよ。あつ、もういかなきゃ。」

「ヤベツ、ホントだ。」

・ ・ ・ そうだ、聞くの忘れてた。アレの事。まあ後でいいや。そうこうしてる間にもう学校が終わってしまった。

「んゝ、終わったゝ、さて、帰るか。」

「公ちゃん。仮入部行かないの？」

「ああ、芳丸。いいんだよ。部活なんて入ったら、休みにも練習だの試合だのあるだろ？休みの日の家に俺がいなかったら……」

「お姉さん達が大変だもんね。」

「大変っていうか俺がいないと一日中飯も食わずにパソコンに向かうか、熟睡してるかだな。」

「いやゝ、やつぱり公ちゃんのお姉さん達はすごいよねゝ、なにしろ、小説家とキャリアウーマンだもんね。」

「実際一緒に暮らすと大して凄くもないぞ。一人は会社じゃ真面目一徹、家ではグータラなメモの二重人格だし、もう一人は集中すればパソコンが自分がオーバーヒートするまで書くのに、いつもはただのオタクだし。」

「公ちゃん、それはコペルニクスの転回、とまでは行かなくとも、

発想の転換をすればいいんだよ。」

「どういう事だ？」

「つまりこういう事、一人はたまに甘えん坊だが、いつもはバリバリのキャリアウーマンだし、もう一人は、充電期間が長い代わりに必要な時にはその多大な才能を爆発的に遺憾なく発揮する芸術家型の小説家である。とまあこれなら誰でも、おお凄いい。と思つてしまつたろう。」

「お前はコピーライターかなんかになれるぜ。」

「コピーライターってなんかパクリみたいだよな。」

「知つたこつちやねえよ！！」

「まあでも事実凄いいよ。なにしろ今期アニメ三本の売れすぎ作家に若干二十八歳にして次期副社長を狙えるポストにいるようなお偉いさんだからね。」

「ん、そうなのかな。」

「そうさ、さっきの話に戻るけど、要するに発想の転換さ。近くにいるから悪い所ばかり分かる、というのは、転換すると近くにいると良い所が見えなくなる。という事だからね。」

「相も変わらず自信を持つてる事にはやたらと饒舌になるな。」

「人間なんてそんなモノさ。」

「意味分らんわ。お前それが言いたいだけだろ。」

「まあね。」

「関係無いが芳丸、お前は仮入部は行かないのか。」

「文芸部に行こうと思つてるけど？」

「そうか。だが残念ながら仮入部タイムは御終いだ。」

「おや、もうそんな時間か、折角の仮入部の内から先輩方に可愛がられるようになって後々役に立つポジションにしよう計画が少し狂つたね。」

「・・・そういうのは口に出すなよ。」

「そうそう。次の土曜日十三時に駅前の広場にきてくれ。北口の方。」

「分かったがなんでだ？」

「さつき言っただろう。君の身体を鍛えるためさ。」

・ ・ ・ やつと話が前に進みそうだ。

（次の土曜）

「遅れてスマンな。ちょうど海姉えの集中タイムが終わってアフターケアに奔走してた。」

海姉えとは二人いる姉の内に下の方、小説家の方だ。本名はうみね海音と言う。因みに上の方、キャリアウーマンの方はことね琴音である。（家は代々女兒が産まれた場合必ず音という字を入れることになってる。同じく男児は命という字だ）

「そういえばなんでこういったパターンではどちらかが遅れてくるのかねえ。」

「遅れてなくとも必ずどちらかが先に来ているから礼儀として自分が遅れた事にするからだろ。」

「ああ、その発想は無かったね。」

「事実今はまだ十二時五十五分だ。」

「じゃあそろそろいこうか。」

「お前は何処に連れて行く気だ？」

「普通じゃないトコ。」

頭に大量のクエスチョンマークと一抹の不安を抱えたまま、二十分程歩くと、普通のビルに着いた。

「ココだよ。」

「こんなトコで何をするんだ？こんなトコじゃ精々普通のジムしかないだろ。」

「そうだね。または大量の事務の人だね」

「なんで口語なのに意味が伝わったんだろうな。」

「そんな事は朝起きたら毒虫になってたこと位どうでも良いことなんだ。」

「それはそれだけで一冊の本、しかも名著になるぞ。」

「まあそんな事は置いといて中に入ろう。」

・・・相変わらず話を変えるのが得意な奴だ。

実際中に入ってみると普通のオフィスだった。所々剥がれたタイルに、外の皮が剥がれてスポンジが丸見えになってる申し訳程度のソファ―、正面の会社名と階数が書かれたボードのような物、一切おかしい物は置いてなかった。

「おい、芳丸、本当にこんなトコでなにすんだ？まさか窓拭きのバイトとかじゃないだろうな。」

「そんな訳無いだろう。いいからちよつと付いて来てみなつて。」

ヤバイ、俺の中の不安度が急激に増してきた。

「そんなに怪しがらなくてもいいって。」

「怪しまないほうがおかしいだろ。」

そう言いつつも着いていく訳だが。てかどんだけ下がってんだ。

「着いたよ。」

「これは・・・・・・」

そのビルが一番下、地下三階に・・・ソレはあった。・・・ソレは、普通のオフィスの出入口が押したり、引いたりして開けるものが主流なのに対して木製、しかも開けるとときキキキキギギギギ、とかいいうようなタイプだった。しかもそれだけで怪しさ満点なのに怪しい点はいくつもある。ハイ一つ目。ドアの近くにはテーブルがあり、しかもそれには小さな骸骨が乗っていて骸骨は口に該当する部分に蝋燭が立ててある。ハイ二つ目。ドアの上の方におぞましい顔をした熊の剥製（首だけのアレ）が飾られている。ハイ三つ目。ドアに大きく、血のような文字で「ウェルカム」とカタカナで書かれている。せめてローマ字で書けよ。

よし、帰ろう。そう思い、踵を返したその時！！！！

「そうはいかないよ。」

突然肩を掴まれた。一瞬芳丸がやったのかと思った。だがその一瞬の考えは一瞬で吹き飛んだ。

俺の肩を掴んだその男の正体とは！！！！ってかなんか三流ホラー小説っぽくなってきたから普通に話そう。

かアイツに二つ名なんてあったのか。知らない＆知りたくも無いな。そもそもヒロインの名前が丸々十ページ以上出てこないってのはどうなってんだろうな。序盤なのに。もうね、アホかと、バ力かと。アレ？なんか主題がずれてないか？俺は萌え話を聞きにここに来た訳じゃないよな？俺の海馬が異常をきたしたのでなければ違うよな？うん違う。

「お二人さん、そういった話題で盛り上がる気持ちは痛いほど、寧ろ痛々しいはよく分かる。だがここは某有名インターネット掲示板のオフ会でも、関西では国営放送のを意味する言葉と同音なサイトのオフ会でもない。ましてや、俺がその参加者であるわけない。あるわけない。（大事な事なので二回言いました。）確かに普通とは地球とアンドロメダ星雲ぐらいかけ離れているが、俺は一般人だ。お前らにとつては挨拶程度の会話かも知れんが俺には耐えられない。というわけで今すぐその話題を終了し、本題に移行することを強く希望する。」

「ふう、つまらない男だねえ、君は。」

つまらん男で結構。

「で、今日はなんで来たの？」

そこから！？

「込み入った事情があつて、身体を鍛えたいんだって。」

「ふーん。」

そついうと熊みたいなオッサンは俺の身体をジロジロと睨みつける。いやまあ睨んでる訳じゃないのだが何分目が細く、目つきが悪いため、睨んでるように見える。

「よし！分かった！」お前は何処の警部だ。

「君は規則正しい生活を送っているね！」

よし、意味不明だ。

「なーんて、冗談さ。こういった商売をしてると人を見極めるのが癖になつてね。うん。じゃあ君を鍛えよう。」

随分軽いノリだな！

「それじゃあ突然だけどもらいたい事がある。」

「なんだ？ いやなんですか？」

「敬語じゃなくていいよ。とりあえず、ジュースを買ってきてもらいたい。」

「それは修行になるのか？」

「いや、全然」

「キレてもいいか？」

「まあ、落ち着いて聴きたまえ。」

「……………」

「実は」

ゴクリ、俺は唾をのんだ。

「喉が渴いてね。」

「芳丸、帰ろう。お前は来るところを間違えたんだ。」

「ああ、そんな！」

「まあまあ、落ち着いてサーたんの話を聞こうよ。」

「まあ、芳丸がそういうのなら。」

「ああ良かった。実はね、その買ってきてもらいたいジュースはこの辺に売ってなくてね。ちよつと遠くまで行かなきゃ買えないんだ。行ってくれるかい？」

この時の俺の選択は誤っていたのか、その事はいまだに分からない。ただ、一つだけ言えるのは……後悔はしていないという事だ。

第二章

今の状態を簡潔にまとめてみよう。多分十文字もいらぬ。

……死にそうだ。

なんなんだこの坂は！ 傾斜が洒落になつてなつてねえよ！ しかも距離が半端ねえよ！ 下り坂で疲れるのは始めてだよ！ しかも名前「平和坂」ってなんだよ！ この坂でなにを平和にできんだ！

すまん。結局十文字じゃすまなかった。

改めて言い直そう。

……死にそうだ。

以上。

おっさんの指定したジューズは、この辺どこの話ではなく、この地域一帯に無かった。

地図は渡されたときから嫌な予感はしてた。俺は地図をマトモに読めない。そこに行き着くまでの距離なんて予測ができなかったんだ。

だから、だからこそ、今こうして倒れそうになっている。膝は初めてド●フを見た、保育園の頃の俺のように大爆笑してるし、唇は運動会のマーチングバンドでやったトランペットの練習を終えて下校しているときの様に震えている。

この坂を下り終わっても、今度はジューズを持って登らなくてはいけない事を思い出し、軽く、否、ほぼ黒に近いぐらいブルーになった。

「や、やつと・・・終わ・・・た」

その長い長い坂を下ったら、すぐ路地裏に入れば目的地に到着する、という事を地図が示していた。

・・・随分暗い感じの路地裏だな。

路地裏に入り進んでいくと、遠い昔日に百円玉を握り締めて通っていたなあ、と、実際にその様なことがあったかのような気分にならん事も無い古びた純和風の一軒家（平屋建て）が建っていた。

地図によるとここが目的地であるようなのだが・・・胡散臭い、実に胡散臭い、まあ胡散臭いのは元からなのだが・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0180k/>

そうだ、人（その他諸々）助けをしよう

2011年1月28日10時33分発行